

『就実論叢』第51号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2022年2月28日 発行

潜在保育士復職支援研修及びリカレント教育 —2021年活動報告—

**Report on the Activities of the Recurrent Education and the Job Training
Project for Potential Nursery Teachers: A Report of the Activity 2021**

松 本 希 ・ 荊 木 まき子
鎌 田 雅 史 ・ 小 谷 彰 吾
土 田 耕 司 ・ ズビャーギナ章子
三 好 年 江 ・ 山 下 世史佳
柴 川 敏 之 ・ 池 田 明 子

潜在保育士復職支援研修及びリカレント教育

－ 2021 年活動報告 －

Report on the Activities of the Recurrent Education and the Job Training Project for
Potential Nursery Teachers: A Report of the Activity 2021

松 本 希 (幼児教育学科) MATSUMOTO Nozomi	荊 木 まき子 (幼児教育学科) IBARAKI Makiko
鎌 田 雅 史 (幼児教育学科) KAMADA Masafumi	小 谷 彰 吾 (幼児教育学科) KOTANI Shogo
土 田 耕 司 (幼児教育学科) TODA Koji	ズビャーギナ 章子 (幼児教育学科) ZVYAGINA Akiko
三 好 年 江 (幼児教育学科) MIYOSHI Toshie	山 下 世史佳 (幼児教育学科) YAMASHITA Yoshika
柴 川 敏 之 (幼児教育学科) SHIBAKAWA Toshiyuki	池 田 明 子 (幼児教育学科) IKEDA Akiko

キーワード：潜在保育士，復職支援，卒後リカレント教育

I. はじめに

2021年度の岡山市の保育所・認定こども園への入園状況は、18,875人の入園申込児童数に対し、利用定員数は18,820人で、受入児童数は18,039人となり、未入園児は836人となった¹⁾。そのうち、幼稚園等での預かり保育や企業主導型保育事業等を利用する児童数等々を差し引き、最終的に岡山市より報告された待機児童数は31名である¹⁾²⁾。就学前児童数は年々減少しているものの、それに反して、入園を希望する児童は増加している。2017年度の岡山市の待機児童数は849人であった。そこから、岡山市は利用定員数を年々700～1,000人規模で増加させて対応してきた²⁾。

岡山県全体でみると、保育所・認定こども園の数は増加している²⁾³⁾。地域保育型事業所も5年前と比較するとほぼ倍の数に増えている。待機児童数の最も多かった2017年度は1048人であったが、今年度は104人となっている³⁾。県内保育所等の充足率もここ数年は100%を割っており、受入過多になっていた頃と比較して、落ち着いてきた印象を受ける。一方、今年度は、新型コロナウイルス感染症の流行により、感染を心配しての入園申込を控えた世帯の存在もあったことが予測される。

就実短期大学幼児教育学科では、2014年度に潜在保育士復職支援プロジェクトを立ち上

げた。保育士としての勤務経験の有無にかかわらず、保育士資格を持ちながら就業していない「潜在保育士」の保育士復帰を後押しすることを目的として、研修会を開催している⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾⁹⁾。加えて、2016年度以降は現職の保育士の学び直しを後押しするために、「卒後リカレント教育」としても同時に実施し、離職者を防ぐことに寄与することも目的としている。受講者には大学へ来てもらい開催してきたが、2020年度⁹⁾は新型コロナウイルス感染症の流行により、紙面開催となった。今年度は従来の対面での開催を目指していたが、新型コロナウイルス感染症の再拡大により、最終的にオンラインでの研修会と紙面での研修会を併用して開催することになった。

2020年の活動報告⁹⁾の中で、「新しい視点での研修会開催」「新たな時代の学び直しのスタイル」等が今後の課題として挙げられた。昨年度から続くコロナ禍及び保育所・認定こども園の入園状況の沈静状態を鑑みても「新しい視点」を取り入れる必要があると考える。

本報告は、このような課題解決を念頭においてすすめた「2021年度潜在保育士復職支援研修会及び卒後リカレント（学び直し）教育研修会」についてまとめたものである。

Ⅱ. 研修会実施までの経過

1. 準備

今年度は岡山県の「保育士養成施設連携強化事業」の「保育士の再教育事業」の受託を受け、若手保育士の就業継続や復職支援の視点も意識して実施した。岡山県の協力を得て、以下のように内容を変更して取り組んだ。

<対象者の拡充>

○変更前（2020年度まで）

- ・保育士資格を持っていて、保育士としての復職を考えている方
- ・現職の保育者

○変更後（今年度）

- ・保育士資格を持っていて、保育士としての復職を考えている方
- ・保育士試験により保育士資格取得を目指されている方（追加）
- ・現職の保育者
- ・地域で子育て支援に携わっている方（追加）

2020年度までも受講希望者からの問い合わせにより、保育士試験により保育士資格取得

を目ざれている方や地域の子育て支援に携わっている方も受け入れていたが、今年度より対象者に加えて明記した。

＜チラシ等の案内送付先の拡充＞

○今まで

- ・市内を中心とした保育施設・子育て支援施設・公共施設、ハローワーク等

○今年度

- ・県内の保育所・こども園・幼稚園・子育て支援施設・公共施設、ハローワーク等
- ・本学幼児教育学科卒業後2年～10年目までの卒業生

2. 研修会開催方法

研修内容は今まで通りである。当初、対面で行うことを想定して準備を進めた。研修会の日程は表1に示す通り、計画した。

表1. 2021年度潜在保育復職支援研修会及びリカレント教育研修会日程と申込件数

日程	講義内容	申込件数	講義内容	申込件数
8/23（月）	特別支援（鎌田）	19	赤ちゃん体操（松本）	16
8/25（水）	保育者論（小谷）	6	情報交換会	4
8/26（木）	社会福祉（土田）	6	声楽（ズビャーギナ）	8
8/30（月）	就実こども園での体験実習 →中止			3
9/4（土）	就実こども園での体験実習 →中止			4

しかしながら8月になり、岡山県の新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、緊急事態宣言の発令が見込まれる事態になった。従って研修会の開催方法を協議した結果、オンライン研修（Google Meetを用いたライブ配信）と紙面研修の併用開催として実施することとした。そのため、表1に示す「就実こども園での体験実習」は中止とした。また、「情報交換会」は、岡山県と岡山市の保育士・保育所支援センターからコーディネーターをお招きして復職に関する支援体制の説明をしていただき、さらに実際に再就職された方も講師に招いて話題提供をしていただく予定であったが、オンライン研修会への変更に伴い、岡山県の保育士・保育所支援センターのコーディネーターの方々のみを招聘し、会を縮小して実施した。

＜研修会参加申込者への案内と流れ＞

申込については、受講希望者が受講したい研修を選んで申し込む形となっている。今年度はオンライン及び紙面での研修会への変更に伴い、以下のようにした。

- ① 申込者全員に、オンライン研修会参加用の URL をメールと手紙にて案内をした。申込みをしていない研修会への参加も可能とした。
- ② 表 1 に示す日程に基づいて、オンラインでの研修会を実施した。
- ③ オンライン研修会実施後、各講師が作成した資料を一冊の冊子にして、参加申込者全員に送付した（申込をしていない研修会の資料も送付）。
- ④ メール及び③に同封してアンケート調査の配布と実施、及び、研修会に関する質問を受け付けた。

3. 受講申込者の特性

受講申込者の総数は22名で、講義への申込件数は延べ66件であった。受講申込者の年代を図1、受講申込者の就労経験を図2に示す。

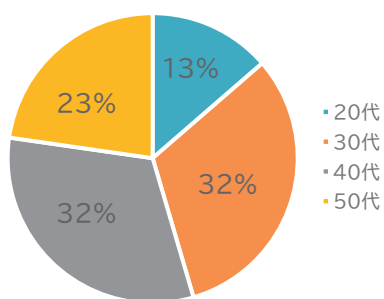


図1 受講申込者の年代

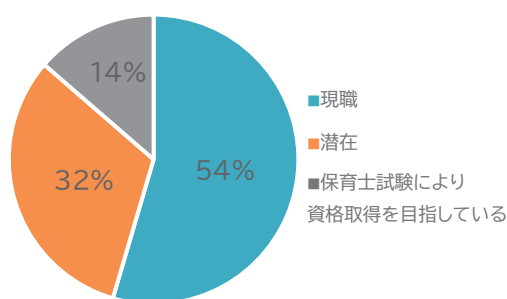


図2 受講申込者の就労経験

Ⅲ. 研修会の内容

1. 特別支援（講師：鎌田雅史）

『特別支援』の講義においては、以下の内容について解説を行った。

- 1) “特別支援”とは何か？～ICFから見た健康、インクルーシブ教育～
- 2) 発達障害とはどのような障害であるか？～定義、特徴、法律～
- 3) “気になる子ども”への支援の具体的な方法～応用行動分析学的視点、チーム支援～
- 4) 陥りやすい“誤解”と早期支援の従業性について

講義の前半部分では、主に特別支援とは何か？発達障害とは何か？といった基礎的な事項の整理を行った。また、「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）」における合理的配慮等に関しても紹介した。

具体的には、特別支援の背景にある国際生活機能分類（ICF）に準拠した“健康”の捉え方や、障害者の権利に関する条約において提唱されているインクルーシブ教育システムについての解説を行ったのち、特別支援の定義や理念に関する概説を行った。

後半部分においては、特に発達障害を持つ子どもたちや、いわゆる“気になる子どもたち”の特徴に応じた具体的な支援の方法に関して、応用行動分析学の視点から概説を行っ

た。発達障害をもつ子ども達は、周囲の大人たちがその障害の特性を理解できていない場合に、保護者や保育者、もしくは友人等から様々な誤解を受けて関係構築が困難となったり、障害の特性を配慮しない指導によって理不尽な体験（例えば、AD/HD の子どもに“集中しなさい”と叱責するなど）な蓄積されたりするリスクが高まる。発達障害の子どもへの配慮不足が原因で引き起こされるすれ違いによる否定的な体験の蓄積は、様々な誤学習や二次障害を発症するリスクを高めてしまう。子ども理解に基づいた支援および、子どもとの関わりにおける具体的な留意点に関する概説を行った。また、特別支援は特定の保育者のみが行うものではなく、園・家庭・地域が連携しながら行わなければ子どもが混乱し、経年的に支援を継続することが難しくなることから、チーム支援の重要性について概説した。

2. 赤ちゃん体操（講師：松本希，秋山真理子）

前半部分では、主に0・1歳児の子どもたちの関わり方や「赤ちゃん体操」をする上での大切にしたいこと、体操をされる側の赤ちゃんにとっての効果、体操をする側の親や保育者等にとっての効果について説明した。また、保育者として保護者に運動の仕方を伝える際のポイントにも解説した。

後半部分では、首すわり以降の赤ちゃんをターゲットにした「赤ちゃん体操」を実際に赤ちゃんの人形を用いて、説明をしながら行って見せた。オンライン研修の受講者の皆さんにも人形やぬいぐるみを用意してもらい、一緒に行ってもらった。体操を行う保育者の動きが早くならないように、童謡やわらべ歌などを歌いながら行う方法をお勧めした。研修会の中では、ピアノの生演奏に合わせて実施した。「赤ちゃん体操」は、赤ちゃんと心を通わせながら行うことが大きな目的ではあるが、併せて、寝返りやハイハイ、一人歩きに向けて必要な体の動きや体の使い方の習得も促進できるよう、体操のポイントを解説した。「赤ちゃん体操」以外にも、ふれあい遊びや産後の母親のマイナートラブルや体調を改善させるための運動を紹介した。

3. 保育者論（講師：小谷彰吾）

我が国の若者が主体性を喪失している現状を内閣府の調査から明らかにし、これらは、幼少期の体験不足、すなわち過干渉、過保護が少なからず影響していること、また、共同体意識が希薄になってきていることも知識量をはかるだけの静的な学力観や個中心の学び方の結果であることを認識することを学びの出発点とした。

激動するVUCAの時代を生き抜いていく子どもたちに求められるのは、答えのない問いに対して試行錯誤を繰り返すとともに、つまづいて失敗しても立ち上がるレジリエンスであり、単なる創意工夫だけではなく、それを具現化していくアイデア実現力であるからこそ、幼児期の達成感、満足感、さらに探究心を刺激する知的好奇心を遊びの中から体感

させていくことが必要であることを確認した。

特に『OECD 国際幼児教育・保育従事者調査2018』で明らかにされている我が国の幼児教育の課題は、リテラシー（読み書き）発達の促進、数的発達の促進、向社会的行動の促進であり、日常の遊びの中でその課題に向けての活動を創意工夫する必要性をお互いに確認した。

4. 情報交換会

（講師：三好年江，澤津まり子，岡山県保健福祉部子ども未来課内 保育士・保育所支援センター コーディネーター2名）

前半部分では、はじめに、本研修会の目的を説明し、保育所の現状説明や復帰された方の体験談の様子を説明した。その後、岡山県保育士・保育所支援センターのコーディネーターから、保育業務相談、保育所とのマッチング等、県の支援体制について説明がなされた。不安になることも多いと思うが、まずは見学やボランティアで職場の様子を理解し、勇気を持って飛び込んでほしい旨が伝えられた。最後に、就職希望の見学を兼ねたボランティアに行く上での心構えや目的、服装、準備物、守秘義務について説明した。

後半部分では、潜在保育士と現職の保育者に分かれて、グループごとに講師がつき、個別の相談や情報交換を行った。特に潜在保育士の方々は、それぞれに復職・就職にあたっての障壁や抱える悩みが異なり、複数の講師が各々の専門性を活かしながら問題が解決できるようサポートした。

5. 社会福祉（講師：土田耕司）

「保育士に求められる、社会福祉的な問題を抱え持つ子育て家庭への支援の基本を考えましょう。」と、テーマを掲げてオンラインで研修会の講義を行った。講義の概要は、保育士は社会福祉の分野の児童福祉領域の専門資格ということをふまえて、①社会福祉の本質、②児童福祉、③児童福祉の専門職「保育士」、④子育て家庭を支援する、⑤これから子ども家庭福祉「こども庁」の流れである。わが国の社会福祉の意図することは、日本国憲法第25条から見ることができ、「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」この文言の最低限度の生活が営めない状態とは、子どもにとってどのような状態なのか。それは、保育に欠ける子どものことでもあり、そこに保育士としての役割との意義がある。特に近年では、保育現場においても子どもだけではなく、子どもの子育て家庭への支援が求められる。その背景には、児童福祉の領域だけでは解決できない課題が少なくない。そこで、子どもの最善の利益を考慮し多方面から包括的に社会福祉の支援が必要である。このことは、国も承知しており近い将来に、多方面にわたる子ども家庭福祉を担う「こども庁」が創設されるであろう。さらに、社会福祉の分野の児童福祉領域の専門資格として保育士に期待されるのは大きい。

6. 声楽（講師：ズビャーギナ章子）

この講義では、豊かな歌声を作るための身体作り、呼吸法・発声法を学び、童謡や手遊びの実技レッスンを実践した。まず授業に先立って、マスクをしていることが日常となった今、顔の表情や声による表現力は、より一層大切なものになっていること、ヴォイストレーニングというと、声を職業とする専門家のための訓練であると思われるがちであるが、誰もが日常的に使う「話し声」に着目して欲しいこと、また、豊かな歌声を作るためにはよい楽器が必要であり、それはすなわち自身の身体を整えることであり、保育者に限らず私たちが健康に生活するうえで必要不可欠であることなど、この授業の目的を説明した。次に、ウォーミングアップとしてストレッチや軽い筋力トレーニングを行った。特に、保育者に多い腰痛や腱鞘炎を防止するためのトレーニングを取り入れ、保育者に必要な身体作りを行った。ヴォイストレーニングでは、呼吸法と合わせて、ピアノで音を取りながら母音、階名で音階を歌う練習をした。手あそびうたでは、「やおやのおみせ」をとりあげ、振り付け、歌詞のアレンジ、伴奏法を学んだ。童謡では、季節の歌（夏）として、「おばけなんてないさ」を練習した。さいごに、実際の保育現場を想定し、導入から発展へと、童謡を通して、子どもたちの歌の世界がどのように広がるかを考え、受講者は各々の意見を述べ合った。

7. 研修会の様子



1. 特別支援

2. 赤ちゃん体操

3. 保育者論

4. 情報交換会

5. 社会福祉

6. 声楽

IV. 受講後アンケート

受講申込者を対象に、研修会内容に関するアンケート調査を行った。アンケートは、メールと郵送にて送り、どちらか一方で回答するよう依頼した。22名の受講申込者のうち、15名から回答があった（回収率68.2%）。

1. 受講者数

表2に、オンライン研修会中に主催者側がweb上で確認した研修会受講者数とアンケート調査により、紙面研修を受講したと回答した者の数を示す。

表2. オンライン研修の受講者数と紙面研修受講者数

日程	講義内容	オンライン受講者/ 紙面受講者	講義内容	オンライン受講者/ 紙面受講者
8/23 (月)	特別支援	14/3	赤ちゃん体操	11/4
8/25 (水)	保育者論	5/3	情報交換会	4/3
8/26 (木)	社会福祉	4/3	声楽	5/3

アンケート調査の回答は、全員の受講申込者からあったわけではないので、予測でしかないが、実際にオンライン研修会に参加した人数に紙面研修会に参加した人の数を加えると、表1に示す申込件数を越える講義もあった。オンライン研修と紙面研修の併用開催によって、仕事等で参加が難しかった申込者の受講機会を促すことができたと考える。

2. 受講者の満足度

受講した研修会の内容を「満足・やや満足・普通・やや不満・不満」の5段階での評価を依頼した。

図3に受講者の満足度を示す。満足 = 1・やや満足 = 2・普通 = 3・やや不満 = 4・不満 = 5と数値化し、平均値を求めたところ 2.1 ± 0.4 （平均値 ± 標準偏差）点であった。「満足・やや満足・普通」のいずれかで回答している者がほとんどであった。

過去の対面で研修会を実施していた際の受講満足

度と比較すると満足度は劣るが、昨年度の紙面研修のみの開催時より受講満足度は向上している。オンライン研修会と紙面研修の併用開催は、一定の評価を得られたものと考ええる。

今回、実技科目（赤ちゃん体操・声楽）を紙面研修で参加された方の中に「やや不満」との回答があった。実技科目については、オンライン研修及び紙面研修ではできることが限られてしまうためと予測する。講義内容を精査するなど、今後の課題としたい。

主催者側の反省点として、初めて学外者を対象としたライブ配信でのオンライン研修会を開催したため、不慣れにより音声や画像の乱れなど受講者に負担をかけ、十分な満足度を得られなかった受講者もいると考える。これについても今後の課題としたい。

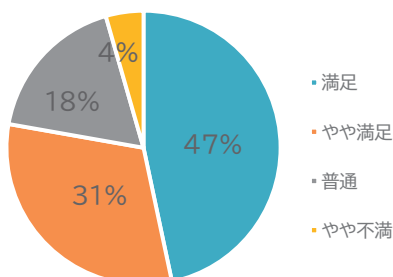


図3 受講者の満足度

3. 受講者の感想

以下に受講者の感想の自由記述を抜粋で記載する。

- ・実技は実際にレッスンを受けたかったです。でも研修会の資料を送付していただき、学びなおすことができました。
- ・コロナ禍で通常の研修会に参加できなかったこと、本当に残念に思いました。園でも様々な安全対策を行っていますが、日々困惑と不安があります。潜在保育士復職支援プロジェクトは本当にありがたく、ブランクのある者には力を与えられています。
- ・受講していない研修会の資料も全て送ってくださり、ありがとうございました。まだ未研修ですが、紙面にて研修をさせていただき、勉強させていただきたいと思っています。もともとパソコンは不得意ですが、オンライン授業（研修会）は初めての経験でした。「オンライン」だったら、無理だから参加は諦めようと思っていましたが、プロジェクトの先生方にご丁寧に教えていただいたり、知り合いの人にも助けていただき、何とか3科目を受講することができました。何事も経験で、今回のことも私にとってはとても大きな自信につながったと思います。
- ・前半、音声聞き取りにくかったため、冊子で内容を確認できてよかった。冊子の配布で他の研修内容も確認できてよかった。
- ・研修ありがとうございました。長期ブランクからの復職で、現在の保育についてもっと知識を得たいと思い、参加させていただきました。

上記により、対面で受講できなかったことへの残念な思いがある一方で、概ね、オンラインでも丁寧な指導を受けられたことで充実感を得られていることが明らかになった。

V. 潜在保育士復職支援研修会の実施状況

潜在保育士復職支援プロジェクトは2014年度より取り組んでいる。研修会受講者数及び再就職者数については、表3の通りである。

表3. 潜在保育士復職支援プロジェクトの実施状況

	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年
研修申込者数	52	24	28	23	29	19	9	22
実受講者数	31	22	24 (12)	22 (9)	25 (13)	16 (6)	9 (1)	22 (12)
就職者数	5	5	7	8	3	1	1	

() 内はリカレント研修の受講者 *2022年1月18日現在

今年度は、岡山県の「保育士養成施設連携強化事業」の「保育士の再教育事業」の受託により実施したため、県内の広域に研修会の告知をすることができた。そのため、受講者

数が増加し、さらに、リカレント教育研修会として現職の保育者の参加が多かったものと予測する。現職の保育者の中には潜在保育士から復職して1年未満の方が数名おられ、そのような方々にも現在の保育に係る動向を学ぶために有効な研修会になっていると感じた。潜在保育士及び現職の保育者のニーズを探りながら、今後の研修内容や運営方法を検討する必要がある。

VI. おわりに一残された課題とその解決への展望

2014年の潜在保育士復職支援プロジェクト立ち上げから8年が経過した。昨年度に引き続いて新型コロナウイルス感染症の流行により、研修会の開催方法が懸案事項であった。昨年度の報告⁹⁾に記した課題に、新しい形態としてオンラインによる開催を示唆していた。コロナ流行以降のオンライン研修やライブ会議の普及により、今年度はそれを実現することができた。参加者の中には勤務時間内に勤務場所から複数名で視聴する者もいた。本学会会場までの行き来の時間が削減でき、勤務の合間に研修に参加できることは、業務が忙しい保育者にとっては有益であると感じた。今後、対面での研修会が再開された場合でも新しい形態として、対面・オンライン・紙面研修を併用した開催について検討の余地があると考ええる。新たな形態での研修会開催の際には、実技科目への配慮と、特にオンライン研修会の場合には、配信側の技術的な問題（例えば、配信環境の整備やネット環境の改善）を解決し、受講者がストレスなく視聴できるよう整えることが課題である。

近年、待機児童の解消に向けて、保育施設の増加に伴う保育者の確保と離職防止が重要課題とされていた。そのため、国や自治体は潜在保育士の再就職支援事業に力を入れてきた。さらに十分とは言い難い点もあるが、保育者への処遇改善も行われてきた。岡山県においては、待機児童の問題が解決したわけではないが、大幅に改善の傾向を示している。そのため今後は、新たなフェーズに変わっていくかもしれない。今まで、潜在保育士と現職の保育者という大きな括りをイメージして研修会を開催してきた。しかしながら、潜在保育士の中には、保育者として就労経験のない者、過去に保育者として就労経験のある者が存在したり、現職の保育者の中でも、勤務経験、役職、勤務する保育施設の種類の違い等があったりと様々なケースがある。我々は、保育を取り巻く今日的課題に注視しながら、最新の知見を踏まえた保育に関する専門的知識の習得や技術・能力の向上に資する研修会を開催しなければならない。その際、個々の置かれた立場の理解に努める視点を持ちながら、潜在保育士にはマッチングした再就職の支援を行い、現職の保育者には知識・技術の向上に伴う働きやすさ感の促進と離職防止のための支援をしなければいけないと考える。このことが、新たなフェーズへの移行が現実的になった時に、本プロジェクトの研修会の在り方の転換を円滑にし、より時代のニーズに基づいた保育者支援を可能にすると予測する。

Ⅶ. 謝辞

今年度の潜在保育士復職支援プロジェクトは、岡山県保健福祉部の「令和3年度保育士養成施設連携強化事業（保育士就業支援及び離職防止）」の委託を受け、実施した。運営に際してもご協力をいただきましたことに感謝致します。またプロジェクトの実施と本報告の作成にあたり、就実短期大学名誉教授の澤津まり子先生に多大なご協力と助言をいただきました。感謝の意を表します。

Ⅷ. 参考文献

- 1) 岡山市（2021）「入園申込児童数（待機児童数）の推移（平成23年度～令和3年度）」
<https://www.city.okayama.jp/kurashi/cmsfiles/contents/0000012/12547/R3jidousuusui>
（最終検索日：2021年10月23日）
- 2) 厚生労働省（2021）「保育所等関連状況取りまとめ（令和3年4月1日）」
<https://www.mhlw.go.jp/content/119220000/000821949.pdf>
（最終検索日：2021年10月23日）
- 3) 岡山県（2021）「県内保育所等の現状について（資料2）」
<https://www.pref.okayama.jp/uploaded/attachment/299457.pdf>
（最終検索日：2021年10月23日）
- 4) 澤津まり子・鎌田雅史・山根薫子（2015）「潜在保育士の実態に関する調査研究－離職の要因を探る－」就実論叢第45号 pp.191-200
- 5) 澤津まり子・田中誠・秋山真理子・松本希・鎌田雅史・笹倉千佳弘・柴川敏之・Z. 山田章子・荊木まき子・伊藤優（2016）「潜在保育士復職支援研修及び卒後リカレント教育の活動報告」就実論叢第46号 pp.199-205
- 6) 柴川敏之・笹倉千佳弘・Z. 山田章子・荊木まき子・伊藤優・田中誠・鎌田雅史・秋山真理子・松本希・澤津まり子（2017）「潜在保育士復職支援研修及び卒後リカレント教育－2017年度活動報告」就実論叢第47号 pp.221-228
- 7) 松本希・鎌田雅史・秋山真理子・荊木まき子・伊藤優・小谷彰吾・土田耕司・柴川敏之・ズビャーギナ章子・土倉由妃・澤津まり子（2018）「潜在保育士復職支援研修及び卒後リカレント教育－2018年度活動報告」就実論叢第48号 pp.163-172
- 8) 小谷彰吾・柴川敏之・鎌田雅史・ズビャーギナ章子・土田耕司・松本希・秋山真理子・荊木まき子・土倉由妃・澤津まり子（2019）「潜在保育士復職支援研修及び卒後リカレント教育－2019年度活動報告－」就実論叢第49号 pp.151-160
- 9) 小谷彰吾・澤津まり子・池田明子・松本希・荊木まき子・山下世史佳・土田耕司・柴川敏之・ズビャーギナ章子・鎌田雅史・上山智子（2020）「潜在保育士復職支援研修及び卒後リカレント教育－2020年度活動報告－」就実論叢第50号 pp.91-99

